

通商時代から鎖国時代

はじめに

江戸時代の徳川幕府の政策であります鎖国について語りたいと思います。

鎖国令は徳川三代将軍家光によってなされた政令で幕末まで続きます。

この政令は家光によって突然出されたわけではなく、豊臣秀吉、徳川家康、徳川二代秀忠の通交政策、通商政策の一貫した流れの中から生まれて来たものです。

ここでは先ず日本の異国（外国）との通交、通商の歴史を古代から遡って見て、鎖国政策に至る道程、鎖国とは何か、そして日本にとって鎖国は正しかったのか、失敗の政策だったのかを考えて見たいと思います。

通交は今日の言葉で外交のことです。通商は交易とも言いました。今日の言葉で貿易のことです。

目次

I 鎖国前史—通商・通交

II 鎖国への道

III 鎖国と開国

iv 鎖国の功罪

I 鎖国前史—通商・通交

1, 古代、平安、鎌倉時代

日本が倭と言われていたころから大陸の中国や朝鮮半島と交際がありました。

紀元前後の中国の前漢、後漢時代から通交がありました。更に紀元2~3世紀のころの倭王卑弥呼は魏と通交がありました。

それ以前からも朝鮮半島の人々とは交際があったことは間違いないでしょうが、文字史料の記録はありません。

4世紀には朝鮮半島とは半島の南部の一部を占領して、半島の百濟、新羅、

高句麗の政争に巻き込まれていました。

7世紀中頃の白村江の戦いで唐軍と新羅連合軍に敗れ朝鮮半島から撤退します。

古代、文化文明は中国より直に、又は朝鮮半島を経由して伝わりました。

米作り、建築、蚕食、文字（漢字）、仏教、儒教等々今日の我々の生活、文化の基盤を教わりました。

中国との通交は前漢以来室町時代まで冊封さくほうの関係です。冊封とは中国の皇帝と臣下の関係を結ぶことです。日本の政権は大和朝廷から足利氏まで政権樹立のため中国に軍事的な支援を得たことはありません。しかしこの関係を結ばないと通交してもらえません。

冊封を受けたら中国に朝貢します（朝貢使）。使節が船1~2杯の貢物を持って中国皇帝に臣下の挨拶をします。皇帝はお返しとして貢物の数倍の価値の物を下げ渡しします。

これを朝貢貿易と言っています。

卑弥呼も朝貢使を中国の魏に派遣します（3世紀初め）。銅鏡や美術、金細工など高価なものをもらったでしょう。そして「親魏倭王」の名称をもらいました。貢物の筆頭せいこうは生口です（奴隷として献上の日本人です）。

その後飛鳥時代の遣隋使、奈良時代と平安時代初めまでの遣唐使と朝貢使派遣が続きます。

日本からの貢物は真珠、翡翠、水銀ぐらいでしょうか、唐からは絹織物、金属工芸品、陶磁器や仏教関係等の書籍でしょう。

もらいの方が圧倒的に多かったのです。

しかし唐の内乱状態で派遣の危険性から平安時代に入って中止となりました（遣唐使候補の管原道真の提案で中止）。

平安時代末期平清盛が日宋貿易に熱心でした。遣唐使廃止以来の通商の再開です。

遣唐使の朝貢貿易は官貿易ですが、廃止後も民間での私貿易がほそぼそとありました。清盛はこの延長戦で活発に日宋貿易を行いました。宋とは正式な通交はありませんでした。ですから民間ベースの私貿易です。

宋からの輸入品は宋銭、香料、絹織物、陶磁器等、仏教等の書籍で輸出品は金、水銀、硫黄、蒔絵、日本刀等です。

鎌倉時代に入って幕府も宋が蒙古に倒されるまで続きます。

2, 室町時代

足利三代将軍義満が日明貿易に熱心です。

明から冊封を受けないと通商はしないとされます。義満は貿易で利益を受けたいので、明の皇帝の臣下の礼をとる冊封を受諾します。

日明貿易は官貿易です。明に許される船数だけが交易できます。勘合と言います。一種の朝貢貿易です。日本側(足利家)には多大な儲けが出ました。

輸出品は硫黄、銅、金、刀剣、漆器で輸入品は銅銭、生糸、織物、陶磁器、書籍です。

しかし屈辱的な通交(外交)だとして息子の四代将軍義持は日明貿易に消極的でしたが、その後室町幕府は足利将軍、細川管領家、大内氏が勘合貿易を引き継ぎ利益を得ます。

16世紀中頃明も大幅な赤字の勘合貿易に嫌気がさし貿易停止となります。

後は日明貿易は民間ベースの私貿易となり、そこに倭寇の海賊行為で混乱が続きます。

倭寇は貿易者であり、海賊でもあります。

3, 戦国時代 i ポルトガル人と織田信長時代

ポルトガル人の船が種子島に漂着したのです。天文12年(1543年)です。ここから日本はヨーロッパとの付き合いが始まったのです。

日本はそれまで付き合いしている世界は中国と朝鮮半島の国々だけで、インドのことはお釈迦様がお生まれになった国と知っていましたが、だれも行っていない国でした。当時は天竺と言っていました。

だれもヨーロッパのことなど関心ありませんでした。

ヨーロッパ人は日本のことを知っていました。13世紀にマルコポーロが著わした「東方見聞録」によつてです。黄金の国ジパングです。

しかしヨーロッパも遠く離れた日本のことは興味がなかったのでしょうか。誰も来ませんでした。

それから年月が流れ、15世紀になり大航海時代が始まります。ポルトガル、スペインが開拓者です。

地中海交易に乗り遅れたポルトガル(バスコ・ダ・ガマの船団)はアフリカの南端喜望峰を經由してインドのカリクッタに到着します(1498年)。

その後インドとの商権を確保していたアラブ人(イスラム教徒)に勝ち、アラビア海の制海権を得ます。

その後インドから東南アジアに進出し、マラッカ（マレイ半島）、マカオ（中国の広州の南）に拠点を作りインド、東南アジア、中国と交易し多大な利益を得ます。

ヨーロッパからリアル金貨、オリーブ油、葡萄酒を持ち込み、香辛料、生糸、などを買付けヨーロッパでさばっていました。

ポルトガルが明からマカオを租借地として手に入れた（1557年）事が日本への渡来を可能にしました。

種子島へ漂着と言っていますが、船はマカオから中国人を水先案内人として乗せており、九州のどこかの港に着くことを目的にしていたのです。

たまたま種子島に着いてしまったのです。

このポルトガル人来航でもたらされた鉄砲は、時は戦国時代で兵器として抜群の人気となりで需要が沸騰、ついには日本でも製造されるようになります。

これ以降ポルトガルと九州の大名と通商が始められ、ポルトガルよりキリスト教布教のため、カソリック（旧教）イエズス会のフランシスコザビエルが来日。以後順次パードレ（司祭）、イルマン（宣教師）が来日し、永禄12年（1569）に織田信長の免許状を得たこともあり、九州を中心に大名にも一般大衆にも急速に信徒（キリシタン）を増やしました。

天正3年（1579）信徒は日本人で10万人と言われていました。初期の輸入は鉄砲、火薬が主で、輸出（代金）は金、銀でしたが、鉄砲を国内で製造できるようになりますと、火薬の原料の硝石と弾の鉛の輸入となります。（火薬は硝石、硫黄、木炭の混合物、日本では硝石は産出しない）

そして更に輸入品としての最大のものに生糸となります。日本でも生糸は生産しますが、中国産の生糸は最高品質なのです。

日本の港は九州を中心に薩摩の坊津、豊後の府内、肥前の平戸、五島、それに長崎等です。

輸入品の生産地は中国です。ポルトガル船は自国の品ではなく中国製品で商売していたのです。いわゆる中継ぎ貿易です。

明と日本との直接貿易は16世紀中頃に勘合貿易が途絶え、倭寇が活動するようになって衰退していたのをその隙をついでポルトガル船が躍動してきたのです。

倭寇退治にポルトガル船が活躍しました。

明とも日本はその後民間貿易で復興します・

ポルトガルとの付き合いは貿易やキリスト教の布教だけではありません。

ルネサンスを経験してきたヨーロッパの科学技術を移入出来たことが大きいでしょう。

鉄砲もそうですが、大洋航海用の船舶、羅針盤、地球儀、時計、進んだ医療を知りました。

信長も地球が丸いことを初めて知りました。

スペインはアメリカを経由して太平洋を渡りフィリピンのマニラに着き、そこに基地を作りました(1571年)。日本進出はポルトガルより遅れました。日本との取引のメインはポルトガルです。

織田信長とポルトガル、スペインとは友好関係が続いていました。
大友宗麟の近親者による少年使節団のローマ派遣を認めます。

4、戦国時代 ii 豊臣秀吉時代

ところが天正10年(1582)に織田信長が明智光秀に討たれ、その後は豊臣秀吉が天下をおさめます。

秀吉は当初は信長の路線を引き継いでキリスト教布教を認めていたのですが、天正15年(1587)突如ポルトガル人、スペイン人の伴天連(司祭・神父)追放令を発します。

表向きの理由は、日本は神国でキリシタンは邪教。彼らは仏法を破壊する。

命令として、20日以内に伴天連は帰国せよ。キリスト教信徒の大名、侍は公儀の許可を得るように。大名、侍は領内の百姓を無理に信仰に引きずり込んではいけない。

これはキリスト教の禁止の令ではありません。仏法を妨げないキリシタンの入国は認められていました。

又、貿易は従来通り行って良いのです。

何故秀吉は、このお触れを出したのでしょうか。

きっかけはキリシタン大名である大村純忠が自領長崎をイエズス会に寄進してしまったことです。長崎を領土として与えたのです。年貢、司法、行政権をです。

これは日本領土を外国に与えたこととなります。秀吉は驚いたでしょう。直ぐに撤回させ、長崎を秀吉の直轄領にしました。

秀吉の本当の心配は、キリスト教の大名とその信徒の百姓そしてキリス

ト教団、ポルトガル、スペイン国が結んで、秀吉に対抗し、日本国を乗っ取ることです。

スペインとポルトガルがアメリカでの領土を得たのはキリスト教団と南蛮国が一体になって乗っ取ったことを聞いたのです。

織田信長は一向宗や仏教勢力に手を焼いていましたので、この力を抑制、牽制するためにキリスト教の布教を認めました。

秀吉も当初はこれを引き継ぎましたが、大名と信徒、その裏の南蛮国が一体となつての反抗を警戒したのです。

秀吉のキリシタン禁制は当初はゆるいものでした。

ところが慶長元年（1596）メキシコ向けのスペイン船が土佐沖で難破し、その取り調べ中に船のスペイン人の水先案内人が発言します。「スペインは宣教師を派遣し、キリスト教を布教して信徒を相応の数とし、軍隊を派遣して信徒に内応させ、領土を獲得する」

これを聞いて秀吉はこれまで見逃していた宣教師等26人を逮捕し、磔の刑に処しました。

秀吉はキリスト教布教は外国征服、統治の策略との断を決しました。

これでスペインとは国交断絶です。

しかしポルトガルとは布教の禁止の下で、通商は積極的に行います。

生糸は秀吉が買い占めます。硝石（カンボジア、シャム産）、鉛（中国、カンボジア産）、鹿皮、砂糖等を輸入し、輸出は銀、銅、漆器等です。

II 鎖国への道

1, 鎖国とは何か

秀吉は慶長3年（1598）没し、後は徳川家康の時代となります。

先に鎖国とはどうゆうものだったかを語ります。

鎖国が完成したのは徳川幕府の三代将軍家光の時です。

江戸時代は鎖国時代とも称せられます。江戸時代のすべての現象、事件、政策、生活、文化は鎖国政策に原を発していると言って過言ではないでしょう。

鎖国令が軌道に乗った江戸時代の人たちは日常生活の中で便、不便は感じなかったでしょう。

しかし幕府の老中など中枢部は18世紀末（老中松平定信）にロシアから初めての開国要求で、鎖国政策の再検討を余儀なくされながらもアメリカ艦隊のペルー提督の来航の幕末まで鎖国を維持します。

それでは先ず鎖国とは何かについて整理しておきましょう。

鎖国という言葉ですが、江戸時代は海禁の言葉の方が通じやすかったですしょう。

鎖国という言葉18世紀の初めにオランダ通詞（通訳）志筑忠雄しづきただおが使用した言葉で幕末には幕府も使うようになりました。

17世紀の終わりにオランダ商館の医官として2年間出島で過ごしたケンペルが日本の歴史、政治、宗教、地理、動植物、長崎から江戸間の紀行文そして鎖国論を記述しました。ケンペルはドイツ人です。オランダ人としてもぐりこんだのです。

ケンペルの日本の鎖国を肯定しています。

日本語訳本が出ていますがB4判で上下2冊で計900頁の大部です。

ただ三代将軍家光が完成させた鎖国に関するお触れ（命令書）の中には海禁も鎖国の言葉も出てきません。

ここでは便利な鎖国という言葉を使います。

現在江戸時代に行われた鎖国の定義とは、

- キリスト教の禁止とバテレン（神父）の取り締まり
- 日本人の海外往来の禁止
- 海外貿易の統制

となり、寛永10年（1633）から五度にわたるお触れが出、寛永16年（1639）に完結させた幕府の政令（家光時代）ということになります。

これはすべてキリスト教禁止、布教の禁止、キリシタン（キリスト教徒の仏教への改宗に関わっての政令なのです。

2、秀吉、家康、秀忠時代のキリスト教の禁制

キリスト教への禁制は豊臣秀吉によって開始されました。

その理由は、キリスト教が大衆とともに大名にも布教され、キリシタンである大名と大衆のキリシタンが一体となり、更にバテレンの出身国のポルトガル、スペインが後ろ盾になり、秀吉に対抗してくることを恐れたのです。

大衆が時の政権に反抗してくることを恐れた一向一揆で知っていましたし、ポルトガルやスペインがメキシコや南アメリカでバテレンの扇動で領土化したことを聞いていました。

キリシタン大名の大友純忠が自分の領地から長崎をイエズス会に寄進してしまいました。

秀吉はこれをさし止め、長崎を自分の直轄地にしますが、キリシタン大名とバテレン（司祭・神父）への行動の規制の必要を感じました。

秀吉は、バテレンによる布教を禁じ、バテレンの退去を命じました。

その後スペインの難破船を拘束した時に、その水先案内人が「スペインは先に宣教師を送り込んで現地人をキリシタンにして、彼らを扇動して、領土を奪う」と証言しました。

その頃は秀吉の命令に反してバテレンが退去せず、布教を続けているのが当時の状況でした。

秀吉は一転厳しい処置に出ます。

先年の禁令違反として宣教師や日本人キリシタン計26人を処刑しました。

秀吉が没する2年前です。

しかし秀吉はキリスト教を全く禁教にしたわけではなくまだ緩いものでした。

一方で秀吉はポルトガルとの通商は活発に行い、独占的に利益を得ていました。

生糸を買い占め、火薬を作る原料の硝石、鉄砲玉の鉛や陶磁器を輸入し、銀を輸出していました。

秀吉が慶長3年（1598）没し後は徳川家康政権となります。

家康はキリスト教政策は引き継ぎます。布教は許さないが黙認の形です。通商は秀吉時代よりも積極的です。

秀吉が断交していたスペインとも通商を再開します。

日本船（朱印船）の東南アジアとの通商も積極的に支援し、日本人の海外進出も認めます。ベトナムやタイに日本人町が出来ます。

オランダ船が1600年豊後の臼杵に漂着し、乗組員のオランダ人ヤン・ヨースデン、イギリス人ウィリアム・アダムス（三浦安針）を家康は引見し、二人を政治顧問として採用します。

オランダ（1609年）とイギリス（1613年）と通商を行うこととなります。

朝鮮とは正式な国交、通交関係となります。

明とは正式な通交関係にはなりませんでした。日本は冊封関係（臣下の

礼)は飲めないでからです。

しかし通商は年々活発になります。ポルトガル船の貿易量を上回ります。通商は明船、ポルトガル船、日本の朱印船で競争になります。ここにオランダ船が進出し、ポルトガル船は衰退の方向になります。

マカオ(中国)でポルトガル船と肥前のキリシタン大名有馬晴信の家来とが騒乱になり、家来が殺される事件が起きました。

有馬氏はポルトガル船が長崎に入港した時にこれを撃沈します。この事件をキリシタン岡本大八(本田正純の家来)が調査して家康に報告し、有馬に落ち度なしとなりました。

有馬はこの際と、岡本に家康に領地回復の斡旋を依頼し、岡本は承諾し、ところが岡本は家康の承諾の朱印状を偽造して有馬に渡し礼を得ます。

これが発覚して大八は火刑、有馬は甲斐に配流になります。

有馬も岡本もキリシタンです。

これで家康のキリシタンへの処置が厳しくなります。今までの黙認から直轄領での禁教を発令します(1612年)。

ここから鎖国完成(1639年)までの道程を追ってみます。

家康が没し(1616年)二代目秀忠時代になります。

キリシタンへの対応は家康を引き継ぐこととなります。明船以外の船は長崎、平戸に限定します。

スペインから国交を求めてきましたが、断絶は続行です。

イギリスとオランダの商館員が共同で上程「スペインとポルトガルの侵略的植民政策とキリスト教伝道は不可分である。朱印船に宣教師が潜んでいる」

実際に宣教師が潜んでいて、イギリス船とポルトガル船が摘発して幕府に訴えます。宣教師2名処刑(1622年)

平戸のイギリス商館が閉鎖されました(1624)。イギリスは採算が取れず、撤退です。

ヨーロッパ船はオランダとポルトガルの二国です。(明船と日本船の航行はあります)

後進のオランダとポルトガル・スペイン連合が東南アジアで制海権をめぐって対立します(1628年)。

日本もスペインの拠点マニラへの遠征を計画したようです。実行しませんでした。この時点で秀忠は東南アジアの制海権に関心があったと思われます。

Ⅲ 鎖国と開国

1, 家光の鎖国

秀忠が没し（1632年）、三代家光時代です。

家光は家康、秀忠のキリシタン対策の徹底を図ります。

キリスト教の全面的な禁止です。鎖国の目的は実にここにあるのです。

家光の鎖国令は寛永10年（1633）から寛永16年（1639）

5回のお触れをだして完結します。

この間に天草・島原の乱が勃発します（寛永14~15年）。

この乱は領主の過酷な年貢に対し立ち上がった人たちで、すべてキリシタンではなかったのですが、幕府はキリシタンの暴動としてとらえました。

キリシタン禁令の鎖国令は一層厳しい内容になりました。

宣教師の入国を認めません。日本人の海外進出を禁じ、通商政策の大幅な改訂をします。

国内のキリシタンには仏教への改宗をせまります。踏み絵を使ってキリシタンを発見し、改宗をせまり、改宗せぬものは処刑します。

檀家制度を作り、日本人すべてどこかの仏教宗派、寺院に所属させます。

通商関係の役人以外一切の異国人との接触は禁止です。

異国でキリシタンになる又はなっている者との接触をさせないため、日本船が異国に行くこと、日本人の渡航を禁じます。

日本船（朱印船・奉書船）の配船は途絶です。海外の日本人町は縮小、廃絶していきます。

ポルトガルは島原の乱で協力しなかったとして通商の全面的停止です（オランダは自船から大砲で反乱軍を攻撃し幕府に協力）。

通商はオランダと明（清）、朝鮮、琉球とのみ行い。オランダと明とは長崎に限って取引を行う。

長崎ではオランダとは出島で、明とは唐人屋敷で関係者のみの対応とします。

すべてキリスト教の排除、布教の排除、日本人とキリシタンとの接触の忌避から出ています。

それでは何故キリスト教国のオランダだけがヨーロッパで一国だけ通商相手となったかです。

オランダは幕府に言ったのです。

キリスト教の布教はしません。通商だけで付き合ひましょう。

家康はポルトガル、スペインに言いました。布教はやめて通商だけにしよう、しかし彼等は通商とキリスト教布教は一体と言い張ります。

キリシタンへの疑いは秀吉以来、家康、秀忠、家光と共通です。

そこに、オランダはポルトガル、スペインのキリスト教と布教による侵略を幕府に訴えます。東南アジアへの後進国のオランダはすでに両国より東南アジアの制海を制しようとしていた時期です。

幕府の鎖国はオランダの日本との通商独占の思惑に乗せられたところもいくらかはあるでしょう。

鎖国は家光によって完成しました。

通商の品目はオランダや明（後の清）とも従来通り生糸がメインです。

輸出のメインは銀から銅に移りつつありました。

鎖国令が出て物語が出てきます。シャムの山田長政ジャガタラお春の物語がありますが、割愛します。

2、鎖国政策の目的

鎖国の真の目的はキリスト教の禁止、キリシタン（キリスト教徒）の排除にあり、通商国の制限や、日本人の海外渡航禁止はすべてこのための徳川幕府の政策でした。

ポルトガルやスペインがメキシコや南米で宣教師を派遣して、現地人をキリシタンにして現地勢力と結託して領土を征服したことは聞いていましたし、オランダ、イギリス等の船員からも証言もありました。

宣教師入国、布教で大名と大衆がキリシタンになることで、一向宗と同じように一揆を起こしたり、キリシタン大名が大衆やポルトガル国や、スペイン国と結託して政権に立ち向かって来ることを恐れたのです。

豊臣秀吉、徳川家康、二代秀忠、三代家光も同じ考えです。

秀吉や家康は通商では東南アジアでの制海権を抑えて通商有利を考えたようですが、家光はその考えをすて、日本船の通商禁止、日本人の海外渡航禁止を打ち出し、通商は明（清）とオランダ、朝鮮、琉球だけにしぼり、明とオランダとは取引場所を長崎だけに絞りました。

すべてキリシタン対策です。

オランダとイギリスは17世紀初めに家康に通商の許可を得た時から、キリスト教の布教は行わない旨、申し出ていました。

イギリスはその後採算がとれず撤退しました。

ポルトガルとスペインは布教（宣教師派遣）を禁ぜられても止めません。

両国の日本征服の野心はオランダ、イギリスからも幕府に訴えられます。

これはメキシコや南米の例があることからこの野心は否定はできないでしょう。

それでは何故織田信長はキリスト教の布教を認めたのかです。

信長は一向宗の一揆に悩まされ、その他の仏教宗派の反抗的な態度を気にしていたからです。

彼らを抑制、牽制する宗教としてキリスト教の布教を認めたのです。

彼らの野心は感づいていたでしょう。しかし彼らが本国から兵力を船で運べる人数は知れており、信長の兵力からして一部たりとも獲られることはない。

キリシタンが反乱してもいざとなれば鎮圧出来る自信があったと考えられます。

秀吉、家康、秀忠、家光はそうは思いませんでした。キリシタンの大名と大衆のキリシタンの結びつきに驚異を感じました。

徳川三代家光は東南アジアでの日本の商域を捨ててでも鎖国令をしきました。

3、ポルトガル・スペインが通交とキリスト教布教が一体の理由

それでは何故ポルトガルとスペインは、通交（外交）、通商(貿易)、キリスト教の布教とは一体でなければならいのでしょうか。

彼らの国の国王やヨーロッパの多くの国王はローマカソリック（旧教）です。中世に領土を獲得して王になったのは力づくによるものです。武力で前王家を倒した後ろめたさがありました。

そこで王としての正統性をローマの教皇にオーソライズしてもらっていました。

一方ローマ教皇は教皇領の保全から王たちの支援を受ける必要があります。

王と教皇は相見互いの協力関係にあります。

7世紀のフランク王国の成立以来この関係が続いていましたが、16世紀にルターによって宗教改革が起ります。

これは一般的にはキリスト教の教えについて一部神父のローマ教皇への反抗と言われますが、実は一部王たちの教皇への反抗でもありました。

王たちも宗教改革を支援して立ちあがったのです。そしてドイツ、オランダでローマを離れたプロテスタント（新教）が設立されたのです。

当時、ヨーロッパでは王国中に司教領（キリスト教の幹部の神父）が混在し増加します。神父の幹部の司教の任免権は王でなくローマ教皇です。

王の中にはこれを不満とします。プロテスタント派となってローマカソリックを離れます。

カソリックは地盤回復ため海外進出を目論みます。

そしてポルトガルのイエズス会（カソリック派）のフラシスコザビエルが布教のため日本へやって来たのです。

彼らは王の支援を受けており、カソリック布教と共に王の領地征服政策に協力しなければなりませんし、征服した方が布教にも好都合です。

宣教師と王国の野望とは一体にならざるを得ないのです。

一方、プロテスタント派は海外布教には多くの期待を持ちません。ヨーロッパで信徒を広めようとしたのでしょ

う。分かれた経緯は違いますが、イギリスもローマカソリックとたもとを分かち、プロテスタントを名乗ります。

ローマカソリックとプロテスタントはバックの国を挙げて仲が良くありません。

東南アジアへの進出が遅れたオランダ、イギリスは協同でカソリック国のポルトガル、スペインのアジア地盤に攻撃をしかけます。

4、ヨーロッパがオランダだけとの独占の通商

ローマカソリックとプロテスタントはバックの国を挙げて仲が良くありません。

東南アジアへの進出が遅れたオランダ、イギリスは協同でカソリック国のポルトガル、スペインのアジア地盤に攻撃をしかけます。

ポルトガルとスペインを日本から蹴落とすために両国を幕府に誹謗します。

日本との通商はポルトガルが衰退していき、オランダが躍進します。

幕府もヨーロッパ勢がオランダ一国になる事は慎重に検討しました。

ただ家光の頃には東南アジアの海域はオランダの勢力がポルトガル、スペインを上回っていました。

オランダはシナとオランダで日本の必要な物（生糸がメイン）を手配できる旨陳述します。

天草・島原の乱（1637～38年）ではオランダは協力（船からの大砲での攻撃）しましたが、ポルトガルは協力しなかったことが決め手となり、ポルトガルとの通商を完全に断交しました（スペインとはそれ以前に断交）。

イギリスもその後又通商の再開を求めてきました。しかしイギリス王室とスペインの王室とが婚姻関係になったことから通商を拒絶しました。

ヨーロッパの国ではオランダが唯一通商の相手国になり、鎖国が始まったのです。

5、開国の胎動

家光没（1651年）後の将軍、幕閣は鎖国令を踏襲していきます。

四代家綱、五代綱吉、六代家宣、七代家継、八代吉宗、そして九代家重。

十代家治の時の1770年代にロシア船が北海道に来航し通商を求めてきます。もちろん拒否しました。

更に1792年十一代家斉の時、漂流してロシアに抑留されていた伊勢の漁民大黒屋幸大夫を連れてロシア船が根室に来航し通商を求めます。

オランダ、清、朝鮮、琉球意外とは通商を行わないと決め、150年続いた鎖国について幕閣で賛否両論が出たのです。

その頃幕府内では海防意識が出始めるとともに鎖国祖法論と共に開国論も出ていました。

鎖国祖法論については後述します。

時の筆頭老中松平定信はロシア使節ラクスマンに長崎入港を認め、長崎奉行に要望書を出すように言い渡します。

ロシア使節が1804年に長崎に通商の許可を求めて来航しましたが、幕府は拒否しました。

幕府は先にロシアには開国を約束しておきながら改めて使節が来航した時には拒否したことになります。

松平定信はその時既に老中を辞していました。

この定信は寛政の改革で有名な仁です。

オランダの商館長は大国ロシアにこの外交はまずいと言ったようです。

その後ロシアとは樺太で小さな争いがあり、日本守備隊はさんざんにやられました。

以後19世紀に入ってロシアの外イギリスやアメリカが何度もやって来ます。

幕府は北海道(蝦夷地)の調査し直轄地としたり、各藩に海防の指示する一方、異国船打ち払い令と薪水給令（避難のために日本寄港の場合は異国船に薪や水の補給を認める）を交互に出したりします。

6、開国と攘夷

アヘン戦争が起り、幕閣はヨーロッパ軍の強さを知ります。オランダからも開国の勧めがあります。

幕府老中は鎖国続行は無理かと思い始めた時に、アメリカンの東インド艦隊のペリー提督が浦賀にやって来て開国をせまります。

ついに幕府老中は開国を決意し、1858年にアメリカ、フランス等と順次修好通商条約を結び鎖国をやめて開国とします。

しかし鎖国続行を主張する攘夷派（鎖国続行）は引きません。

幕末の尊王攘夷の争乱に発展します。

攘夷派では脱藩浪士が暴れますが、この思想の根幹を植えたのは、水戸の徳川斉昭やそのお抱え学者会沢正志斎等、長州の吉田松陰、桂小五郎等の長州藩士、土佐の武市半平太と結構インテリ階級なのです。

しかし最後は、水戸も、長州の攘夷派も開国の必要性を認識し、明治維新となります。

それでは何故彼等は攘夷（鎖国続行）を主張したのでしょうか。

一つは、鎖国は日本国の祖法との認識がありました。日本は古代からずっと鎖国で通してきた。国是であると思ったのです。

これは間違いです。鎖国は三代徳川家光によってなされた政策です。キリシタン禁制のためです。

それ以前の古代から日本は中国と正式の通交（国交）がない時はありましたが、民間での通商にはほとんど規制はなく自由に行き来していました。

もちろん倭寇は取り締まりましたが。

家光以来鎖国150年でこの令が武士も天皇、公家も庶民も学者も当時の人のほとんどが祖法と誤ってしまっていたのです。

それから攘夷派の人たちは、国防が大事なことは認識していましたが、火砲、銃器、艦船に係る科学技術がヨーロッパ各国より劣っていることも分かっていました。

それは国内で学べば直ぐに追いつくレベルだと思っていました。

しかし日本とヨーロッパの科学技術、工業力とは数段の差があったのです。

江戸時代初めでもヨーロッパの船は大きく、頑丈で造船工学では日本は敵いませんし、大砲の性能は抜群に上を行きます。

しかしこれは鎖国して海外に出て行かず、大名の戦力を劣化させるため

には追いつく必要はないとの家光の考えでした。

18世紀の半ばにイギリスから産業革命がおこり、科学技術が飛躍的に進歩し、ヨーロッパに広がります。

井上聞多や伊藤俊輔はロンドンに密航してヨーロッパの軍事力の大きさを知り、その差がとてつもなく大きいことを知りました。更に長州は下関での四カ国連合艦隊（英・仏・露、蘭）に敗退し、攘夷(鎖国)がとても無理だと認識しました。

長州は開国に転向します。幕末の幕末です。

吉田松陰ももし密航(1854年)が成功し、ヨーロッパを直に見たら攘夷をやめて開国路線に変わったでしょう。

ヨーロッパ人と接触の多かった幕府の老中等幹部は幕末早くこの科学技術の差、軍事力の差を認識しました。

iv, 鎖国の功罪

1, 賛否両論

さてそこでこの鎖国は正しかったのかどうかです。その功罪について江戸時代から今日まで色々議論されて来ました。

賛成派から

- 政治の面から鎖国したから植民地にならなかった。鎖国しなければ徳川幕府はキリシタン大名にキリシタン国と結託して倒され、日本国は南米の国のようになっていた。
- 文化の面では、日本独自の文化を形成された（歌舞伎、俳句、浮世絵日本料理、陶磁器、鮫等）。
- 経済の面では、輸入に頼らない自給自足経済が出来上がった。

反対派から

- 政治の面では、日本が独立を保ってこれたのは鎖国制度のおかげはない。東南アジア諸国が植民地になり、清(中国)も一部植民地になったのを見ても鎖国政策は役にたっていない。
- 内政の面では、飢饉の時に輸入が困難だった。武士や浪人の行き場がない。
- 経済の面では、国内産業の停滞。
- 文化の面では、日本は古来中国や朝鮮の文化を積極的に取り入れることを

ベースにして来た。日本独自の文化はその上に醸成されてきたものである。各方面でもっと進歩したと思われる。

○科学技術の低迷による軍事力（外交）、産業力（工業力）の劣勢

2、科学技術の低迷による軍事力（外交）、産業力（工業力）の劣勢

実にこの科学技術が幕末にはヨーロッパに格段に劣ってしまっていたのです。これが鎖国政策の最大の問題点なのです。

鎖国時の家光もヨーロッパの科学技術の高さは知っていました。

しかし大型の航洋船や性能の高い大砲は大名の武器となり排除したいのですから技術を学び取り入れる必要はありません。

欲しいのは医術でしょうが、漢方もありますので絶対必要とは思わなかったでしょう。

ヨーロッパは15世紀末葉のルネサンス以来世界で科学技術優位できました。これで堅牢な船舶の建造、羅針盤などの航海術の進歩、銃器の進歩によってアメリカやアジアへの植民地政策を成功させてきました。

その後ヨーロッパ優位は続きますが、更に18世紀の中ごろに産業革命がイギリスでおこります。

日本は鎖国中です。

産業革命は蒸気機関を綿織物工業、蒸気汽船への活用が大きいのですが、これ以外にも船舶は帆船から蒸気汽船へ、木造から鉄へ、外輪船からスクリュウー船へと進展し、火砲（炸裂弾の発明）、銃器（火縄銃から元込め撃鉄銃へ）への進歩は段階を踏んで進歩します。

これらは一時点で一気になしたわけではなく、又ヨーロッパ一国でなしたわけではなく19世紀以降にかけて日進月歩で発達していくのです。

鎖国中、日本では遅れていることはなんとなく分かっていたでしょう。

しかしヨーロッパがどれ位進んでいるのか知りませんでした。

唯一の情報の取り入れ国はオランダですが、オランダは鎖国を始めた頃の17世紀にはヨーロッパでも東南アジアでも優勢でしたが、18世紀終わりにはフランスに一時併合されるなど劣勢の国になっていました。

そのことは幕府は知っていました。

19世紀に入って来航するロシア船、イギリス船への対応が出来ません。海防が言われます。

海防と言っても大砲は日本にはないに等しいのです。オランダから買う

のですが、オランダも技術的にはヨーロッパトップではありません。

イギリス、ロシア、アメリカの性能にはかないません。

海防に堅牢な船が必要と思ったのは19世紀中頃の幕末になってからです。

アメリカ艦隊のペリー提督が来航（1853年）するまで、幕府は鎖国続行か開国かで悩み、ついにヨーロッパの科学技術（軍事力）の高さを認識して開国を決めます。

ペリー提督の旗艦は蒸気汽船の外輪船です、次の年の来航の時はスクリーナー船です。進歩は早いのです。

日本は1855年にオランダより木造の外輪船の寄贈を受けました。動かし方はそこから学ぶのです。

造船、航海術、鉄製造（溶鉱炉）、兵器（大砲、銃器）、天文、地理、医学の歴然たる差を幕府及び有力大名は知りました。

水戸も長州も幕末の最期に気づきました。

鎖国のまま追いつける格差ではなかったのです。

ヨーロッパ先進国に留学して徹底的に学ばねば一朝一夕では追いつけない差を感じました。

明治に入って富国強兵を掲げ日清戦争、日露戦争と戦い勝利を得ましたが、主要艦はすべてイギリス製です。日本で造れたのは艇などの補助艦です。

鎖国で産業革命の科学技術の進歩の波に乗り遅れた日本がヨーロッパにようやく追いついたのは、太平洋戦争直前の頃とされています。

鎖国は、18世紀の中の産業革命以後のヨーロッパの科学技術の発展に乗り遅れたことが最大の問題と言えるのです。

ヨーロッパで政治的にも、科学技術も劣勢になっていたオランダ頼りでは国の立地は難しくなっていたのです。

それでもアジアの諸国のように植民地にならずやって来られたのは幕末の騒動を乗り越え、明治維新を迎え以後がむしやりにヨーロッパの科学技術を学習してきたからでしょう。

私論ですが、鎖国したことより開国の時期が遅れたことに問題があります。

ロシアの使節が1792年に来航し通商を求めました。時の老中筆頭松

平定信は開国（通商）の意志をロシアに伝えました。しかし彼が老中をやめたため実行されませんでした。

本当に開国の意志があったのかも分かりません。

この時に開国（ヨーロッパ主要国）しておれば、科学技術の格差は幕末、明治維新のころのよりは小さかったでしょう。

但し、ヨーロッパは既に封建政治が終わっており、議会制民族主義（国民国家）の時代に入っていますので、この影響は避けがたく中央集権国家への移行（倒幕か公武合体かは別にして）、即ち明治維新はより早く訪れることになっていたと思います。

以上

2021年7月14日

梅 一声

文献史料

- 1, 将軍権力の創出（朝尾直弘著作集第三巻）朝尾直弘 2004 岩波書店
- 2, 江戸幕府と東アジア（日本の時代史14） 荒野泰典2003 吉川弘文館
- 3, 鎖国政策下の日本貿易（明大商学論叢82（1）：27－46 浅田毅衛
2000
- 4, 詳説日本史B 2005 山川出版社
- 5, 近代の胎動（日本の時代史17）藤田覚 2003 吉川弘文館
- 6, 鎖国（日本の歴史14） 岩生成一 1966 中央公論社
- 7, 鎖国と海禁の時代 山本博文 1995 校倉書房
- 8, 鎖国制の成立（講座日本史4 幕藩制社会）朝尾直弘 1970 東京大学出版

- 9、海禁と鎖国（アジアの中の日本史Ⅱ外交と戦争） 荒野泰典 1992
東京大学出版
- 10、日本誌 上・下 エンゲルベルト・ケンペル著 今井正訳 1973
- 11、アジアと欧米世界（世界の歴史25 加藤祐三・川北稔 1998
中央公論社
- 12、国史大辞典 吉川弘文館